

マヤ文字の解読について

植 田 覚

- I 序
 - II 未解読の理由
 - III 解読小史
 - IV マヤ文字目録
 - V あとがき
- 本文注
附 録

I 序

マヤ人は新大陸原住民の中で、最もすぐれた文字を有した民族である。その象形文字は、先住民族、たとえばサポテカ民族 Zapotecac、オルメカ民族 Olmeca などに影響を受けた可能性

マヤ文字の解読について

もあると考えられているが、確とした痕跡のないいま、そのオリジナリティーは注目すべきであろう。⁽¹⁾ マヤ文字を模倣して作ったといわれているアステカ民族 Azteca の文字は、マヤ文字に比べてずっと幼稚である。

イギリスの文字研究家ディリンジャー David Dringier は絵文字を次の三つに分けた。即ち、

- 一 図解法 Iconography
- 二 合成または表意文字 Synthetic or ideographic writing
- 三 分析文字 Analytic writing

彼によると、マヤ文字はシュメール文字、エジプト聖刻文字 Hieroglyphic writing やクレタの絵文字などと共に、三の分析的文字に分類される。つまり多くの実験的な絵画から、習慣によって選ばれ、簡易化した絵で一つの物または言葉をあらわす絵画的なシンボルを有する文字である。⁽²⁾ この分析文字は、絵文

字の中で最も発達した文字である。

マヤ文字が何時頃現われ始めたかは、はっきりわかっていないが、おそらくキリスト紀元前といわれている。現存のマヤ文字が書かれている遺物の最も古い年代は、キリスト紀元三二〇年である⁽³⁾。発生は、この年代より少なくとも四〜五世紀、あるいは六〜七世紀前に遡ると考えている学者もいる⁽⁴⁾。

マヤ文化は、コルテス Hernán Cortés のメキシコ征服（五三）頃にはすでに滅びつつあり、一六九七年に完全に滅びたが、その頃までマヤ文字はまだ使われていたと、スペイン人の記録に見える。尤もこの頃のものには *Hispanize* されていたから、コロンブス以前の文字とは違っている。ただ最盛期から千五百年位は余り変わらないうで続いていたといわれている。

マヤ語には約二十三の方言区分があるといわれているが、大きく分ければ、高地マヤ語と低地マヤ語に区別でき、残りは方言と考えてよい。マヤ語のテキストにある文字は、殆ど低地・特にユカタン地方に住んでいた民族のもので考えられる。

Maya という名称の «*m*» という字は、スペイン人が導入したもので、音価は «*s*» と同じである。ランダ神父 Diego de Landa ⁽⁵⁾ の両者に何の区別もしていない。ただ常識的に、母音の前にあるから «*y*» とするのだと思えばよい。 *Maya* → *maia* を語源的に辿ると、*ma* は大地、*i* は木々の芽、*a* は水を意味し、豊稔の三つの基本的要素を代表する。マヤの概念に従えば、«*ma-i-a*» は「水から生まれた母、及び萌芽」の意味

であるが、芽と水が豊稔の基本的シンボルであるから、「水の生命の木」の意味ともなる。また「生命の木」のマヤ語は *ya (ia)* であるから、«*ma-ya*» または «*ma-ia*» は、「大地の母と生命の木」の意味となる。

マヤ人は曆に支配された民族であり、そのために必要な諸々の数の概念を体系化して、曆を記録するために文字が作られたと考えられる。

マヤの象形文字は、その形態からみて、方形、長斜方形 *rhomboid*、または卵形のものが多いが、諸々の形をした文字があり、主として曆の記述に使われた、奇怪な表情の人間の顔が使われている文字がある。また形の大小から、大型のもの、横長のもの、小型のものとして三種に分けることもできる⁽⁵⁾。始めてマヤ文字を見る者は、必ずやその奇怪な表情をもつ顔に驚かされる。こうした怪物の発明という点では、シュメール人、ヒンドゥ人、エトルリア人、中国人なども遠く及ばない。また中国語やエジプト象形文字のような、ちょっとしたヒントでとける絵文字とは異なり、マヤの象形文字は、我々から見れば、全く不可解な一定の体系をもって作られている。

マヤの文字は、約八〇〇の象形文字の記号を含んでいるといわれている。現在まで、一五〇乃至二〇〇の記号しか解読されていない。現存の三つの古文書には、三七二の象形文字があり（クノロヅフは二七〇という）、そのうち一七〇がよく使われている。だから約半分がまだ解読されていないわけである。

マヤ文字は、また、内容的に二つに大別できる。即ち、

(一) 天文学、暦、数字のサインをあらわす文字で時間を数えるのに使われた文字

(二) (一)の記号を伴うある種の説明的機能をもつ文字、つまり、(一)の文字のもつ根柢の性質を述べる文字

であって、(一)は現在大部分が解読され、(二)がまだ未解読なのである。

しかし最近、今後の解読の土台となるべき重要な著作が相次いで出版されている。これらを基にして、漸次解読が完成されることと思われる。注目すべき解読の試みも行なわれたが、まだその成果が充分納得されるまでに至っていない。

拙稿では、まず始めに、何故いまままでマヤ文字が未解読とされているのかについて考え、ついで現在までの解読の歴史を集約的に辿ってみたい。また、最近出版された二つの「マヤ文字目録」についても言及してみることとしたい。

II 未解読の理由

まず今日まで、何故マヤ文字が解読できなかったかを考えてみるのも意義があると思う。その理由の一つは、現在まだ未解読となっているエトルスコの文字の場合と同じく、残された資料がごく少ないという点にある。衆知のごとく、スペイン人の中米征服と共に随行したカトリックの僧侶達が、マヤ人の宗教

マヤ文字の解読について

は邪教だとして徹底的な焚書・偶像破壊を行なった結果、征服前にあった書冊はすべて灰燼に帰し、わずかに難を逃れてヨーロッパにもたらされた三種の古文書が現存しているだけである。即ち、ドレンスデン文書 Codex Dresdensis、トロ・ホルテス文書 Codex Tro-Cortesianus、ペレス文書 Codex Peresianus で、終りの二者は、現在それらの文書を所有している場所を冠して、マドリード文書、パリ文書とも呼ばれている。しかも、このうちペレス文書は、初めと終りが欠けている断片で、保存状態が極めて悪く、文字も欠損や不鮮明が目立ち、解読の材料としては殆ど使えない。これら三種の文書の推測される内容が、三種とも異なっていることから、ヤマ文化のもつ多様性も考えられるが、これら以外の文書の残存していない現在、知るよしもない。

またランダ神父によれば、スペイン人が征服時破壊したり焼いたりした原住民の遺物は、五〇〇〇の彫像、一三の大祭壇、大小二〇〇以上の像、二七の鹿皮装の本という数にのぼっているというが、その後失われたものを加えれば、この数字は遙かに大きな数にのぼることは明白である。

一八世紀以来、多くの学者、探検調査団が、メキシコの各地、たとえばコパン Copan、ボナムベック Bonampak、チャパス Chiapas、カンペチェ Campeche、パレンケ Palenque などで発見したわずかな石碑、文字のある階段、書板、壁画、土器なども、多くを失った今、原資料として貴重なものではある

が何といつても、数多くあつたといわれている文書が失われてしまったことは解説上致命的なことである。文書以外の文字はごく限られた主題のものが多くからである。

またシャンポリオンの古知によるまでもなく、マヤの「ロゼッタ石」がないことも、ヤマ文字が未解説になつてゐる大きな要因の一つであろう。アメリカのマヤ学者モーレー、トムソンなどは、ランダ神父の「ユカタン誌」⁸⁾を、マヤの「ロゼッタ石」と呼んでいて、たしかに現在マヤ文字が約半分解説できたのは、この本のおかげであるが、他の言語と併記してある資料がないので、マヤ語と他の言語との比較から推定を引き出すことは不可能であるし、またマヤ語諸資料の徹底的な比較によつて、その妥当性を吟味しうるには、古文書、石碑、浮彫、彫像等残された資料はあまりに少なすぎるのである。

もう一つの理由と考えられるのは、ツエーラム C. W. Ceram の本に面白く書かれている。⁹⁾つまり解説の基礎的な知識が残されていらないからだという。以下同書から拾つてみる。

旧世界の大部分の文化民族は滅びて、地上から跡形もなく消えてしまった。そして彼等の言語も「死語」となつて、彼等と共に死滅してしまつた。だから我々は、その解説に苦勞するのである。しかるに、マヤ人は、今日なお生きており、彼等の言語は古代の失われた帝国のそれと殆ど変化なく生きてゐるのである。しかしマヤ語研究への手掛りは、旧世界の文化に比べてごく少ないのである。というのは、バビロニア、エジプト、ア

ジア、ギリシア等の古代諸民族については、昔から知られており、多くのことは失われたが、なおまだかなり多くのことが、文字や口碑や伝説の形で残されてゐるからである。しかしマヤ文化は、「首をはねられた文化」であり、残されたものはごく少なく、それもスペイン人の征服後全く埋もれてしまい、アメリカの探検家スティーヴンズ J. L. Stevens が廢墟を発見して、いまでは古典的な著作となつた旅行記を出版して、センセイションをまき起こしたのは、一八四一年であつた。また前記ランダ神父の「ユカタン誌」も、書かれてから三〇〇年も発見されずに埋もれていたのである。つまり、マヤ文化の遺物は、三世紀の間、誰にも知られずに眠つていたのである。

III 解説 小史

マヤ文字は、スペイン人の征服と共に知られるようになつた。マヤ語研究もこの時に始まる。

征服と共に、メキシコに赴任した殆どすべてのスペイン人牧師は、原住民にキリスト教を布教するため、多かれ少なかれマヤ語を学び、スペイン語を原住民に教えた。

最も古いマヤ語についての著作は、十六世紀のエレラ Antonio de Herrera、ウィルラバンド Luis de Vilapando といつた人達のもので、彼等はマヤ語をラテン文字で書き、マヤ語の辞書を作つたり、文法をまとめたり、教会のドクトリーナ

をマヤ語に翻訳したりした。また現在では、その名前だけが知られていて、現物は散佚してしまつた作品をみても、一六〇一—一八世紀のマヤ語研究が盛んであつたことがわかる。ソラーナ Alonso de Solana は最初のマヤ語辞典(一五〇)の著者であつた。その他この時期の学者としては、シュダー・レアル Antonio de Ciudad Real ヒウ Gaspar Antonio Xiu、アギラーロ Pedro Sanchez de Aguilár、メーナ Carlos Menar、サン・ブエナヴェントゥーラ Gabriel de San Buenaventura といった人達の名が挙げられる。しかしこれらの人の作品は、いまから考えれば甚だ不備なものであつた。

しかし他のどの本よりもマヤ語解読の手掛りとなつたのは、ランダ神父の「ユカタン誌」である。彼の言語学的な著作の全貌についてはよくわかつていない。ただ「ユカタン誌」だけが現存している。彼は、これを一五六一年から六六年までかかつて書き上げた。彼は越権の嫌でスペインに召喚され投獄されたが、その間に自分を弁護する資料としてこの本を書いたのである。この本はその後長く埋もれていて、書かれてから三〇〇年もたつて、即ち一八六三年にフランスの宣教師ブルプール(正しくはブラッシュュール・ド・ブルプール) Charles Fieune Brasseur de Bourbourg がマドリッドで発見した。翌年彼はパリで仏訳を付して原典を刊行した。

ランダ神父は、フランシスコ派の伝道僧として、スペイン人のメキシコ征服の数年後、即ち一五四九年にユカタン地方に赴

き、ユカタン、メリダ地方に修道院を建てた。また彼は、例の焚書に敏腕をふるつたが、マヤ語については非常に緻密な研究を行ない、マヤ語のアルファベットのみなならず、マヤ人の秘教の基礎といふべき事柄にも精通していた。「ユカタン誌」(正確に言えば「ユカタンの事物に関する報告」)はマヤ人の生活、住居、食事、暦、数学、宗教生活、神々、戦い等に関する事柄を詳しく述べたものであるが、マヤの象形文字のスケッチ風な模写を入れた暦の体系や、マヤ文字の研究にも多くの頁をさいていて、これが後の解読の基礎となつたのだつた。特にアメリカのモーレーヤガン Thomas Gann、トムソンなどは、この本を使つてマヤの暦を解読したのである。だからクノロゾフは、彼等のことを「カレンダー学派」などと呼んでいる。ランダ神父は、マヤ語の二七のアルファベットを発見した。これを古代マヤ都市の遺跡の刻文に当てはめたところ、暦の日付が信頼できることがわかつたが、彼の発見したアルファベットが、実は、無価値であることがすぐにわかつて、解読のカギを見つけたと喜んだ人々を失望させた。何故なら、複雑なマヤのアルファベットの解明は、彼の発明したものであつた。彼の考えたものは、マヤ語の組織と矛盾するものであつたが、実際に使われていたマヤ語をかなり研究した。彼によれば、マヤ文字の組織は次の三つに分けられる。即ち、

一、簡単な記号または文字 ciertos caracteres o letras

これは phonetic である。

二、人間または動物の顔形をしている文字

figuras これは figurative である。

三、二に何らかの記号が付された文字

algunas señales en las figuras これは symbolic である。

また実際に使われていた文字の実例から調べて、次の如く分類している。

一、古い型の文字体系または、Tabal system と呼ぶ型。これは神聖をあらわすと考えられていた文字で、アステカの古文書に見出されるのとよく似たシラビツクな文字と結合した象形文字が含まれる。合成文字 escritura de parte junta と呼んでいる。古文書の上端にみられる、装飾的な役割をする文字がこれに当たる。

二、新しい型の文字体系または Tabalah system と呼ぶ型。これには、単一の記号または文字、アルファベット記号、マヤ語で「選ばれた」を意味する < zibih > の記号などが含まれ、孤立文字 escritura a partes と呼ばれる。彼はこの文字は四つしかあげていないが、実際は、古文書に二〇位ある。それにこの文字は、天文学的な意味や曆に関する意味をもっている。彼はこれらの文字の最初の音を phonetic な意味にとって使っている。彼の考えたアルファベットの残りの二四は合成文字であって、古文書の中には見出だせない。

三、装飾的な象形文字、この文字には人間や動物の絵がつけられている。

この三つの分類と、旧世界の古代文字の三つの分類、即ち、一' epistolographic' 二' hieratic' 三' hieroglyphic と比較してみると面白い。

ここで問題となるのは、曆をあらわす文字の最初の音を、その文字の音価としたことにある。たとえば、二六〇日周期の祭式曆の二〇の日付の文字のうち、chuen を < cu > cauc を < cu > cini を < ki > ix を < e > と phonetic に置きかえた。たしかに、彼のアルファベットは誤りであるには違いないが、ただ phonetic の面から考えれば価値がある。おそらくランダ神父は、ナウア語 nahual の用法をマヤ語に適用したため、こうした誤りを生じたのではないかと考えられている。こうした誤りにも拘らず、「ユカタン誌」はマヤ語解読の基礎となった。

ランダ神父以後の研究では、ルス Joaquin Ruiz、ベレス Juan Pio Perez といった人達の業績がある。しかしルスの著作は、マヤ言語学の見地からみてあまり価値がない。またベレスの著作も基本的な知識、たとえばマヤの時代区分の長さの解で重大なミスがあるから、象形文字の知識にそれほど役立つてはいない。ただ散佚途上にあつたマヤ語の古文書の保存という面で重大な寄与をしたといえる。

そういう貢献では、ブルブルール、ペレント Carl Hermann

Berendt'、Brinton、Daniel Garrison Brinton'、ゲーツ William Edmund Gates といふた学者の業績は忘れられない。ブルブルの業績は、トローノ文書の刊行（二六九—七〇）と前記ランダ神父の「ユカタン誌」の刊行とであり、さらにサン・ブエナヴェントウーラの文法書の刊行も見落とせない仕事といえる。しかし彼の「マヤ語彙集」は、いまではあまり価値がない。¹⁰² ベレントの仕事は、現在、ペンシルヴァニア大学の博物館付属図書館にある「ベレント・コレクション」となって残されている。残された手写本をできるかぎりコピーし、マヤ語を研究した。彼のコピーした文書の中には、いまでは散佚した貴重な資料が見られ、中でも、現在でも使われている唯一の辞書であるモートルの辞書のコピーは、彼が他の辞書を使って修正し、付加し、比較して成ったものである。¹⁰³ またブrintonもベレントの後継者として、ベレント・コレクションを大学に寄贈した人で、彼のマヤ語に関する仕事としては、「チラン・パランの書」の抄訳（英語訳）があるが、一八八二年に刊行されたとはいえ、有益でしかも翻訳書としては最も大規模なものであった。ゲーツの業績も、その内容と我々に与える貢献の大きさからいって、ブrintonと一二を競う仕事をした。マヤ古文書のコレクションは、いまでも最大のコレクションとして知られ、現在ハーバード大学のピーボディ博物館にある。中でも、モートルとサン・フランシスコの辞典、コロネル、サン・ブエナヴェントウーラ、ベルトラン等の文法、「チラン・パランの

書」の一部の複製は貴重である。¹⁰⁴

その後、アメリカ、ドイツ、フランス等のマヤ学者が、マヤ語を研究し、彼等の著書の成果の積み重ねの上に、マヤ語解説の土台ができ上がっていった。一八〇〇年以降、三つの古文書の複製刊本が相次いで世に出ると共に、古文書の commentary も出版された。マヤの古文書の一つがあるドレスデン王立図書館（現サクソン図書館）の司書フュールステマン E. W. Förs-temann によるドレスデン文書の刊行（一八〇〇）と commentary（一八〇〇）、ブルブル（一八〇九）とローニ Léon de Rosny（一八〇三）によるトロ・コルテス文書の刊行など。また前記モートルの辞典（一八五九）、ゲーツの辞書（一八五三）、トッツェル A. M. Tozzer の文法書（一八五三）もマヤ語解説にあたって欠くことのできない資料である。またゼーラーの諸研究も忘れることができない。一九三八年にはヴォルフ Werner Wolff によって、マヤの古文書の解説が現代語訳を付して試みられた。彼の解説はブルブルとモートルの辞書に基づいて行なわれている。最近の解説と比較検討すべき価値があると思われる。

フュールステマンはドレスデン文書刊行後の二〇年間、この絵文書の解明に没頭した。その後一四年間にわたって、文書や石碑にあるマヤの暦の秘密を解く不朽の業績をあげた。彼はマヤ人によって用いられていた独創的な二〇進法を発見し解明した。そしてこれが天文学及び年代の諸事項に、いかに使われていたかを初めて指摘した。その他重要な研究を数多くして、マ

ヤ文字研究の基礎を築いた。

一八九一年グッドマン J. T. Goodman は、マヤ語のテキストの年代の部分の解読に成功した。(以前は彼は、フェールステマンの研究を参照していないといわれていたが、最近の研究では彼の業績を読んでいたことが判明した)フェールステマンは主にドレスデン文書を材料としたが、グッドマンは石碑を材料として解読を行なった。

以後モーズリー A. P. Maudslayi、スピンデン H. J. Spinden、ロング C. E. Long、ティープル J. E. Teeple、ニイヤー H. Beyer 等主にアメリカの学者がマヤ語解読に役立つ数々の研究をしている。

しかしこういった業績の中でも特筆すべきは、モレーのそれであろう。彼はマヤ文字研究のため、発見された殆ど全部の遺跡を精力的に訪れ、また未発見の遺跡を探し続けた。それに要した莫大な金額はすべて自弁であった。次に崩れゆく石碑類のコピーをとるのに忙しく、ためにマヤ語の解読や研究に十分な時間をかけることができなかつたが、一九一五年に出版した「マヤ象形文字入門」¹⁶⁾は monumental な研究である。この本で彼は主に暦や天文に関するマヤ文字を殆ど完全に解読した。彼はランダ神父の誤りが表音尊重から由来したと信じて、マヤ語は殆ど表意文字であると主張した。事実時を数えるために使われた天文、暦、数字をあらわす文字は殆ど表意文字である。しかし表音的要素のあることも、ある程度認めていたし、

その表音的要素がもつと認められれば、表意的要素は、それに従って、多少その phonetic value が限定されてくることも認めていた。彼の分類によると、マヤ語は次の三つに分けられる。即ち、

(一) 表音的要素をもつ文字——ある音をあらわし、意味とか思想とは全く分離している。

(二) 表意的要素をもつ文字——ある意味乃至思想をあらわしている。

(三) (一)と(二)の結合したもので、二つの要素を合わせもつ。¹⁷⁾

第一に、マヤ語はすべて表音的要素をもつという説は誤りであり、ランダ神父の例がこれである。マヤ文字をすべて表音体系またはアルファベットに直してみるといふ試みは失敗であつた。

プリントンは、ランダ神父のアルファベットから推論できる二つの事実を指摘している。マヤ文字は大部分表意的要素をもつが、表音的要素も確かにあるという理論である。ゼーラーも、確かにマヤ語には、神、人間、場所などの名称をもつ合成文字があるが、それらの要素は表音的な原則と結合しているが、しかしマヤ語の大部分は、表意的な原則に基づいて組み立てられている conventional symbol であるといふ。¹⁸⁾

以上の学者の努力によって、マヤの数字、日、月、神の名が確実に判読できるようになった。しかし現在残っている遺跡のそれは、主に後古典期、つまり紀元一〇〇〇年から一五〇〇年

の間のものであるし、神の名も、首長や神官や戰士のものであると推測されるところから、時代的に、階級的に限定されたものであることに注意すべきである。マヤ人一般が日常の語彙として使った表示方法について正確な観念をもつことは、いままお依然として困難である。たしかに現在のところ、マヤの文字体系は専ら表意文字であるらしい。しかし殆ど表意文字から成っている文字体系では、異なった記号の意味を決定するのは極端に困難である。これに反して、表音文字体系の言語では、ある言葉は音が決まっております、その音価はどんな時でも全く変わらない。マヤ語にも表音的要素があることが、上述の如く以前から主張されてきた。マヤ語には、おそらく、六箇の文字が純粹に表音的な *Basiss* の上に構成されていることが知られている。しかしまだ未発見の資料から、表音的要素をもつ文字が発見され、その数がふえれば、マヤ語の表音的要素がもっとはつきり解明されるであろう。それはまたマヤ語自体の概念も大きく変えることになろう。事実現存する象形文字の一部が音節から成り、それ故、マヤ語のすべての可能性を表現しえたと仮定することもできる。何故なら、それ以外の文字は、もしそれが表意文字であるなら、たとえその使い方が限定されたものであっても、何千というマヤ語の語彙を書くのに十分ではないはずである。だからこれらの表意文字の一部が、古代エジプトの象形文字と同じように、観念ではなく、音を示すのに使われたに違いないと考えられる。ヴォルフ B. Wolf も、マヤ語の中に

マヤ文字の解説について

は表音的要素とならんで、*syllabic* な要素があることを認め、同じ概念を表現する表音的な記号と結合したと考えた。

ソヴェトのクノロゾフの最近の研究は、こういった点で注目すべき理論を樹立した。

彼は、モーレーの表意文字尊重の観点を誤りとし、マヤ文字の大部分は表音文字であると主張して、次のように分類した。

I 表意文字

II 表音文字

(1) 母音。単独に、または言葉の終りに用いられる。たとえば、*a, o, e, i, …… moou, te*。アルファベットイック・タイプと呼び A とする。

(2) 母音十子音。たとえば、*ah, ak, ev*。シラビック・タイプと呼び AB であらわす。

(3) 子音または母音を伴った子音。たとえば、*pak, kutz, kulk*。言葉の終りのアルファベットとして使われる。アルファベットイック・シラビック・タイプと呼んで B (A) であらわす。この型はシラビックとして使われる時は、大部分最後の母音が落ちる。たとえば *k(a), k(u), z(unu)*。

(4) 子音十母音十子音。たとえば *bal, nal, thal*。これはシラビック・タイプと呼んで B A B であらわし、語根、接尾語を書くために使われた。

III

限定詞 これはごく少ない。発音もしない。表音または表意の記号で書かれた文章を説明するために用いられた。

この分類に基づいて、彼はマヤ文字の独立記号を一五〇、単語を二〇〇、文章を三〇例あげて、それぞれ解説を示している。この研究に当たって、彼が典拠としたのは、現在までの諸学者の研究であって、その約半分がモートルやブルブルの辞典からの引用である。

しかし彼のこの理論の実例としてあげた材料は、その評価を正しく判断するためには、残念ながら少なすぎるといわざるをえない。それに彼は、ランダ神父のアルファベットを全く信用しており、マヤ語はアルファベティックな文字とシラビックな文字の間を交差し、子音+母音でマヤ語の音価が決定されると考えたのである。トムソンやバルテル T. S. Barthel はクノロゾフの説には全く懐疑的である。彼が従来誤りとされていたランダ神父のアルファベットを典拠として採用したからである。トムソンもクノロゾフの説を公平に判断するのは他の人がやるべきだという。いづれにしろ、クノロゾフの理論はオリジナルであり、正しく考えられる価値があると思われる。

さらにもう一つ、ソヴェトで注目すべき業績がある。

一九六一年、シベリアで、ソヴェトの三人の数学者が電子計算機を使って、マヤ文字の解説を試みるという画期的な研究がなされた。その成果が四冊の本になって同年出版された。直訳すると、「古代マヤ文字研究における電子計算機の適用」であって、前書きによると、第一巻はマドリッド文書、第二巻はドレスデン文書と象形記号、日、月、数字、象形記号の組合せ、

マヤ語—ロシア語辞典、第三巻は象形記号の総括組織目録、第四巻は文書の分析と文字の構成について、研究方法、アラビア数字(算用数字)算法、プログラムの適用について扱っている。どうしたわけか、第四巻は現物が入手できないので、解説方法がよくわからないが、二つの古文書(バリ文書、つまりペレス文書は欠損が多く解説の材料として使えなかったに違いない)を幾つもの断片に分け、古代マヤ語を古代スペイン語の表音方式に直したラテン文字で記述されている。また象形記号は三桁の数字、日は一桁、月は二桁、ローマ数字は週を示している。

しかしこれは文字の判読ではなく、クノロゾフやモートル等の研究成果をもとにして、判読した各記号の読みを用いて、テキストの音読を試みたものである。つまり電子計算機の記憶装置に各記号の音価を覚えさせ、それに対応する各記号に分類番号を与えた上で、各テキストを機械に読ませたのだと思われる。この結果、ドレスデン文書とマドリッド文書の文字のうち、約四〇%(約六〇の文章)が解説できたという。そしてこの解説に要した時間は、二日間フルに計算機を操作(約一万回)してえられたものだという。さらにマヤの三つの文書は、一〇ないし一一万回の操作で、全部解説可能であると確言した。この計算機の操作が終わってから約四ヵ月後に、解説の結果が発表されたわけである。

これはいわば翻字であって、機械による記号の置きかえであ

り、現代文への翻訳ではない。しかしこれを基にして、近い将来、翻訳が行なわれれば、これは重要な業績となるだろう。

また、マヤ語の組織がかなり複雑であるところから、こういう試みをすぐ受け入れるわけにはいかない。

事実、この結果について、アメリカの学者はまだ納得していないし、ソヴェトのクノロゾフでも、これは少なからず不正確な結果であると明言している。そしてもとより、解説事実は、古代記述法の解説に利用できるのはもちろんであるが、問題はプログラム（つまり素材の機械への置換え）の編成方法の完成がさらに重要であり、まだこの仕事が残されていると述べている。²⁴⁾

一九五〇年以降には、バルテル、バーリン H. Berlin、プロスコウリアコフ女史 T. Proskouriakoff などの学者の研究が、マヤ文字研究の進歩に貢献している。バルテルはマヤ文字と同じく、未解説だったイースター島の文字を解説し、マヤ文字についても、ドレステン文書について有益な仕事をし、一九五二年より五五年に至る四年間に、五冊もの著作を出して、精力的に活躍している。バーリンは“*emblem*”と名づけた、ある特別な言語の研究で、新生面を開いた。彼によると、古代マヤの各主要都市は、それぞれ他の場所には見出だされない特別な文字をもっていたという。しかしこれらの地方的な“*emblem*”の接辞 *affix* はどこでも同じであるから、*main sign* だけが研究する価値があるという。プロスコウリアコフ女史は、石碑の

主題と結合している文字のパターンを鑑別する仕事をし、いまその成果をまとめて出版する準備をしている。彼女の研究は、今後の解説にとって、非常に重要な仕事となってくると思われる。²⁴⁾

トムソンの「マヤ象形文字入門」は、一九六〇年新版を出したが、これは一九五〇年に出した初版を大幅に改訂増補した大冊の本で、現在までの諸業績を *summarize* して、マヤ文字の一覧を内容別に分類して載せている。またクノロゾフは、「古代マヤ原住民の文字」(元益)で、スペイン人征服後のラテン文字で書かれたマヤの諸々のテキスト(断片が多いが)の翻訳をし、マヤ語文法とマヤ語—ロシア語辞典、マヤ文字一覧とその解説、さらに現存の三つの古文書の各頁を写真複製して載せている。この本も総計六六三頁の大冊の本で、計らずもトムソンの本と競い合っている感がある。トムソンの著書は暦の解明が大部分を占め、その点では現在まで、最も詳しい記述といえる。またクノロゾフの著書では、文法と辞典(語彙集)では最新のものである。

以上の如く先進諸学者の業績によって、マヤ文字も漸次解説されつつあるが、完全に解説が行なわれるのはまだ将来のことだと思われる。それに新しい資料の発見や、新しい理論の樹立によって、現在までの成果がくつがえされることもありうる。さらにすぐれた研究がされて、マヤ文字が解明される日がくることを願うわけである。

IV マヤ文字目録

以上のようなすぐれた研究と、同じ価値があると思われる重要な基礎的資料というべき著作は、トムソンとツインメルマン G. Zimmermann のマヤ象形文字目録である。以前に出た目録としては、ゲーツが一九三一年に出したものがあつたが、彼はその中で二九六の main sign と一二の minor element に分けていて、ある場合には、その接辞だけが異なっている文字も区別されて別の番号がつけられていたり、またある minor element が main sign の中に含まれてしまつていて、分類も甚だ不十分なものであつた。

一九五六年に出たツインメルマンの目録は、すぐれた業績であり、整然と分類されており、合成文字のすべてに番号がついており、接辞のつけられている位置が示してある点ですぐれている。トムソンの目録も、分類は殆どツインメルマンの方法を模倣している。

ツインメルマンが使つた分類と番号は、

1~91 接辞 Die Affixe

100~169 Die Hauptzeichen (人間の体または顔をもつ

文字)

700~763 Die Hauptzeichen (動物の体または顔をもつ

文字)

1300~1377 Die Hauptzeichen (因襲的乃至裝飾的な記号)

(他に若干の変形、付属形の文字も別にあげているが、番号付はしていない。)

であつた。トムソンは、現存のあらゆる資料(この中には、この時新たに発見された資料もある)から、ツインメルマンの分類に従つて文字を排列した結果、この分類では少なすぎる部分が出てきて、もっと柔軟性をもつ数を考えざるをえなかつた。

たとえば、接辞は一〇〇を遙かにオーバーし、main sign のうち、人間の顔をもつ文字も一〇〇を越えたので、次の分類を作つた。即ち、

1~370 接辞 affix

501~856 main sign (動物の顔をもつ文字を含むが、人間の顔をもつ文字を除く)

1000~1087 main sign (人間の顔をもつ文字)

1300~1347 その他の記号 dubious "purgatory" group

両者の実数を計算してみると、

affix main sign 計

Zimm. 83 200 283

Thom. 370 492 762

となつて、両者に相当の開きがあるが、ツインメルマンの実数は、たしかに少なすぎ、マヤ文字の総目録としては不十分であるが、トムソンののは、彼自らいうように、ある文字は、別な文

字の変形でしかないことも考えられ、そういうダブりが幾らかあると考えると、八〇〇乃至八二五位が、現在残っているマヤ文字の総数であると考えられよう。しかも将来、もっと研究が進めば、この数はもっと減るし、また新たに発見されるテキストなどから新しい文字が発見されることもあろうから、結局、差引七五〇というのが、マヤ文字の総数として妥当な数であるという。この数は、残っているマヤ語の資料が少ないことを頭に入れておかねばならない。エジプトの象形文字の総数は七三四という数からみて、一般に絵文字は六〇〇より少ないことはないと考えられる。

この七五〇という数は、マヤ語がもともとシラビックではなかったことを示している。マヤの文字体系はもと表意体系であって、ある時からシラビックに変わった可能性も考えられる。しかし現在のところ確証できない。

トムソンの main sign 四九二のうち、三三は古文書に一〇〇以上出てくる。マヤ語の典型的な形は、main sign + prefix + postfix であって、時々他の文字も結合する。接辞は main sign として使われることもあり、ごくまれに main sign が接辞に変わることもある。こういった組織は、現代マヤ語の方言である Yucatec, chol, chontal 語の組織と殆ど同じである。

現段階ではトムソンの目録は、マヤ文字目録としては最良と思われるが、今後の研究で修正を予想される。

マヤ文字の解説について

V あとがき

以上の如く、マヤ語は逐次解明される過程にあるが、これが解明されれば、まだ不明のことの多いマヤ文化の諸相が、少しずつ判明することになる。

トムソンは近く第三の著書を発表するであろうし、クノロフ、バルテル等の学者も、その新しい著作が期待される人達である。またメキシコの各地で、未発掘の遺跡が掘り出され、思わぬ貴重な資料が出てこないとも限らない。将来に期待したい。

拙稿は、たまたま手にした諸文献に基づいて、その一部を紹介したにすぎない。ぜひとり上げるべき重要な文献を落としているかもしれないし、理解の不十分さから、思わぬ誤解をしている個所もあるかもしれない。識者の御叱正を乞う次第である。

なお、本文および注にあげた資料のうち、館蔵のマヤ文字を直接扱った本としては、

1. S. G. Morley. An introduction to the study of the Maya hieroglyphs. KU 598 (57)
2. Э. В. Берников, и др. Примененные электронных АК 3609
3. Diego de Landa. Relacion de las cosas de Yucatan.

AG 3289

の三種だけである。

〔注〕

(1) トムソンによると、これらの先住民族の文字は、ごく初歩的な段階にとどまっていた、殆ど発達しなかったという。若干の「日」の名称などに同族性が見出されるが、あるいは地域的に同一の起源に基づくことも考えられるが、現段階では確証はないという。

J. E. S. Thompson. *Maya hieroglyphic writing: an introduction*. New ed. Norman, 1962, p. 27-28

また、メキシコ湾岸のトレス・サポテカで、オルメカ風の石碑が発見され、マヤの数字を使った浮彫りがあったという。またマヤ文字に似た象形文字がオルメカの石人形に見出だされ、現在のところ、これが新大陸最古の文字といわれている。だから、いままでいわれてきたように、マヤ人が新大陸古代文明の数学、天文学、文字などを発明したのではなく、オルメカ民族が作ったもので、それがマヤに伝えられたとも考えられるという。

泉靖一「アメリカ大陸の古代文化」(世界の文化十六巻、中米とアンデス 五七頁)・寺田和夫「メソ・アメリカ文明のおいたち」(同書 八九頁)

(2) D. Dringer. *The hand-produced book*. London, 1953, p. 19-22.

(3) モーレー S. G. Morley によると、一八六四年に、ガテマラで発見された、縦八・五インチ、横三インチの小さな石斧状のひすいで、Leyden Plate と呼ばれているも

のがそれで、横棒一と丸●(一一つが五をあらわし、●一つは一をあらわす)を使ったマヤの数字が書かれている。文字は上から七つ、その下に小さな文字が八つ書かれ、そのうち、数字があるのは上から二つ目の文字から、八・一四・三・一・一二と五個ある。マヤの数字は下から上へと単位が大きくなってゆき、二〇進法である。右の数字をこれにあてはめ、キリスト紀元に換算すると三二〇年となる。なお、ウアハクトゥン Uaxactun で発見された石碑には、三二八年という年号が刻まれている。そしてモーレーは、さらにもっと古い年代を書いたものが、石以外にもあったはずだという。しかし高温多湿の熱帯性気候のマヤの土地では、その素材は朽ち易いものだったので失われてしまったのだろうという。

S. G. Morley. *Ancient Maya*. 3. ed. Stanford, 1958, p. 50-53.

トムソンによると、一九五九年、マヤ文明の中心地パレンケ Palenque で、メキシコの国立人類学・歴史研究所が行なった発掘で、アメリカ、ペンシルヴァニア大学のシューク博士 Edwin Shook が、重要でよく保存された遺跡を発見したが、それには Leyden Plate よりも二八年前、即ち二九二年の年号があったという。現在のところ、これが最古の年代である。

J. E. S. Thompson. *op. cit.* p. V.

(4) 普通、マヤの文化は、キリスト紀元の始まりとほぼ同じ頃から形成されたと信じられているから、文字の起源もそ

の頃からとも推論できる。クノロゾフ Ю. В. Кнорозов も起源は紀元前であろうという。

Ю. В. Кнорозов. Система письма Древних Майя. Москва, 1955, p. 53.

また、モーレーは、六〜七世紀前頃から発生したと考えている。

S. G. Morley. op. cit. p. 55.

(5) 石碑や階段などに印されている文字は、その場所的制約から、多少変形したものになっている。

(6) 拙稿「古代メキシコの古文書について——マヤの三つの写本——」私立大学図書館協会会報第四四号、一九六五年、を参照された。

(7) W. Wolff. Déchiffrement de l'écriture maya et traduction des codices. Paris, 1938, p. 11.

(8) 原題 *Relación de las cosas de Yucatán*. 引用は、メキシコ、Porrida 書店が一九五九年(但し八版)に出した版による。本書のことについては後出。

(9) Güter, Gräber und Gelehrte. 邦訳「神・墓・学者」村田数之亮訳 昭和三十一年の下巻二二六〜二二七頁に載っている。

(10) 一九四〇年の人口調査によると、メキシコのマヤ原住民は、一九五七二六〇人であって、メキシコ、ガテマラ、ホンデュラス、英領ホンデュラスなどに住んでいて、そのうち、四万五千人ほどはワステック族 *Wastek* である。なかでも、近代文明から全く隔絶して、完全に原始

的な生活をしているのは、メキシコのチャパス州に住んでいるラカンドン族 *Lakandon* であって、七つの集団に分かれてゐるが、総計しても一七三人しかいない。

Paul Rivet. *Cités Maya*. Paris, 1962, p. 95.

(11) A. M. Tozzer. *A Maya grammar*. Cambridge, Mass., 1921 には、後半一四〇頁の詳細な目録が載っている。

(12) この語彙集は「ユカタン誌」の仏訳付原典の出版の時、附加されたもの、なお、一八七二年には、「ユカタン原住民の象形文字体系の研究を付したマヤ語の辞典、文法およびクレストマティール *Dictionnaire, grammaire et chrestomathie de la langue Maya précédés d'une étude sur le système graphique des indigènes du Yucatan (Mexique)*, Paris」を刊行している。

(13) ホールルの辞書 *Dictionario de Motul, maya-español*, atribuido a Fray Antonio de Ciudad Real y Arte de lengua maya por Fray Juan J. Martínez Hernández. Mérida, 1929 として刊行されている。最近のマヤ文字解読(例えばクノロゾフやソヴエトの電子計算機による試みなど)には、この辞書が使われている。

(14) 「チラン・パランの書」については詳しく述べない。ただ略述すると、これはマヤの事蹟についての記述が含まれ、スペイン人の征服後、マヤ語をラテン文字で書いたマヤ原住民による文学作品であって、宗教的な内容をもつもの、歴史を記述したもの、医学を扱ったもの、年代または天文の事蹟を述べたもの、祭礼を述べたもの、

文学など諸々の内容をもつ八つの書を集めた文書で、他にも断片的な資料が入っている。どうしてこういう名称がついたかはつきりわかっていないが、「チラン・バラ」は「口をもつ人」の意と解され、「チラン」は文書をかく僧侶階級を呼ぶ名称であり、「バラ」はスペイン人の征服直前にいた「チラン」達の最有力者の名前で、豹または魔術師の意味がある。この書の価値は、第一に、スペイン人の征服後使われていたマヤ語がラテン文字で書かれたことにあり、これが、マヤ語の諸知識に大いに裨益したわけである。El libro de los libros de Chiam Balam 2. ed. México, 1963, p. 9-10.

(15) 注(7)の本がそれである。解説は三つの文書のうちの一部について行なわれただけだが、詳細な解説も付され、他にマヤ語—フランス語の語彙集も書かれている。本稿に詳しく紹介することができないので、他の機会に譲る。

(16) An introduction to the study of the Maya hieroglyphs. Washington, 1915 (Smithsonian Institution Bureau of American Ethnology. Bulletin 57)

(17) Ibid. p. 26.

(18) Ibid. p. 30.

(19) 注(4)の小冊子がそれで、ロシア語とスペイン語で書かれている。各々本文一二頁、実例三一頁。引用はすべてスペイン語の部分からのものである。

(20) ドイツの文字学者ゲルプ I. J. Gelb は、マヤ語は表音文字体系であらうという。つまり表意文字は、そこに隠れ

れた国語さえわかれば解説できるものであり、マヤ語は現在でもユカタンの原住民約三五万の人々に語りつがれているのであるし、それでも未だに未解説であるからには、マヤ語が表意文字体系であるはずがないという。(P. E. クリター「失われた言語」大城訳 昭和三年、(二二九頁))

(21) Э. В. Евреинов, Ю. Г. Косаев, В. А. Устинов. Применение электронных вычислительных машин в исследовании письменности древних Майя. Новосибирск, 1961.

(22) D. Driinger. Writing. London, 1962, p. 178.

(23) Ю. В. Кнорозов. Письменность индейцев Майя. Москва, 1963, p. 46.

(24) J. E. S. Thompson. op. cit. p. V-VI.

(25) Ibid. A catalog of Maya hieroglyphs. Norman, 1962.

G. Zimmermann. Die Hieroglyphen der Maya-Handschriften. Hamburg, 1956 (Univ. Hamburg)

Abhandlungen aus dem Gebiet der Auslandskunde, Bd. 62. Reihe B, Bd. 34)

(26) W. E. Gates. An outline dictionary of Maya glyphs. Baltimore, 1931.

(27) クノロフによると、マヤ文字の総数は八二一であ

り、ほぼ妥当な数であるが、トムソンの目録と比較して

ないので、彼の分類が正しいかどうかまだ不明である。

Ю. В. Кнорозов. Письменность, p. 307-337.



hahal chaan.

雨空。



itz chaan pat'hi.

空（天上界）の露が現われた。



nak chaan tippan.

雲の去った空が現われた。



ziimal chab kin.

太陽が大地を乾かす。



ox pocmal kin tum kinil.

太陽はその時、そのすべてを焼く。



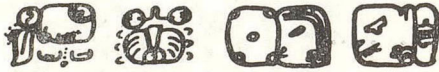
kin ak ichinah ti chab.

雨は大地を豊かにする。



amac'hi chikinil Cek Xib Chac.

黒いチャック（雨の神、また西を司る神）が西風に出会った。



amac'hi mahal Kan Xib Chac.

黄色いチョック（雨の神、また南を司る神）が南風に出会った。



amacaan Chac ti kante mahal.

チャックが黄色い木の中で南風に出会った。



amaccan ich coltah Chac cutz.

一羽の七面鳥が（いけにえを捧げる）場所でチャックに出会った。



amacaan kuul otoch Chac takan.

成熟した果物が（いけにえを捧げる）神殿でチャックに出会った。

（九三頁）で、和訳すると次の如くなる。
一 クノロゾフの「古代マヤ文字」の中の解読実例中の一頁

附 録 (写真)

17		
17						
17	117-504-203-033	026-067-214		
17						
17	403-220-111	216-505-220	065-173-112	...-023		
17						
17	204-153-220	026-153-344	VII-361	XVI-430-150-063		
17						
17						
17						
17						
17						
18	154-123-177-	154-123-204-	570-255	III-171-	502-117-	574-515-
18	504	504		504	334	212
18						
18						
18						
18						
18	541-030	245-265-063	067-245-013	245-515-220-111	534-255	
18						
18						
18						
18						

..... ..

chac-... u Mam

tun bal zac tun can

kintun u cuch VII ek XVI chakalte

hel Kin Ak Kauil ox xul et Chac Balam och

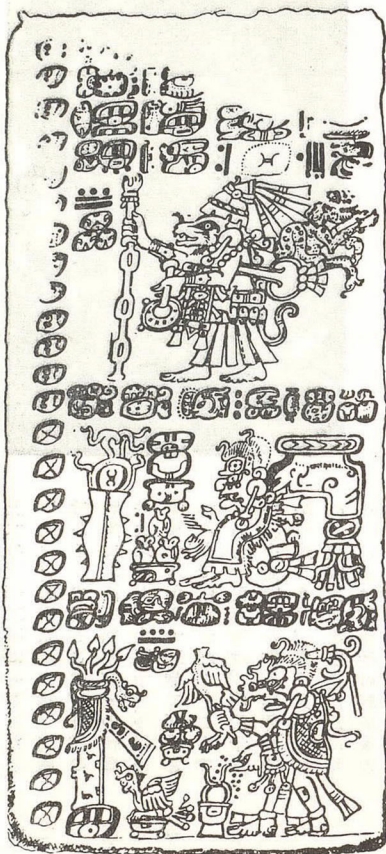
zac ah yax te nohol yax tun Poc(Chac) Kauil

二 ソヴェットの電子計算機による解読の見本で、左はドレスデン文書第二六頁の写真複製。(これはフェニールステマンの頁付による。この頁付は誤っており、クノゾフによると、正しくは五五頁である。なお、この文書はいわば帖本であるので、二六丁というべきところであろう)。原本は $8.5 \times 20.5 \text{cm}$ の大きさである。貝殻様のものが文字であって、その余白に奇怪な絵が描かれている。

右側はこの文書を、電子計算機によって文字の各記号を番号に直して並べたもので、象形記号は三桁、日の記号は一桁、月の記号は二桁の数字、ローマ数字は週期を示す。左側縦の17、18という数字は日の記号であり(マヤの日の記号は二〇ある)、それぞれ九十七番目、十八番目の日に当たるわけであって、一三ずつある。17は Caban、18は Ezanab と呼ばれている。

枠外の下文字は、上の三桁の数字を解読したものであって、古代スペイン語の表音方式に直したラテン文字で示されている。

これらの絵や、この解読結果の説明、あるいは絵と文字との関連を説明するのは今後にゆずり、ここではとりあげない。



(本館洋書整理系)

マヤ文字の解読について